
星降る薔薇園のジンクス

李葉

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

星降る薔薇園のジンクス

【Nコード】

N0893Y

【作者名】

李葉

【あらすじ】

”上”から”中”へ『落とされた』天使、メルフィは天原 和音という人間として慎ましく(?)過ごしていた。しかし”下”から”中”へ『上げられた』悪魔、地戸 椀とひよんな事から出会ってしまい…物語は、加速する。

暴走する妖獣、契約、そして弱まる”星の力”とは?さらに『伝説』も現れ、過去までもが複雑に絡まり合う糸の中に、2人は巻き込まれて行く…!!!

";上";ノ国(前書き)

いきなり『落とされ』ます。うわー。

";上";ノ国

――だいてんし大天使メルフィ。

…はい。

――そなたは罪を犯した。そしてその罪は重い。…分かっておるな？

…承知しております。

――ならばよい。…判決を下そう。我がそなたに。そなたは…。

……。

――…有罪じゃ。全員一致で、な。…いや、一人を除いて、か。

……！！

「――分かるな？あやつはそなたを慕っておるのだ。例え皆に批判されたとしても。」

「サーラン…。」

「――しかしほぼ全員一致となれば我はどうすることもできん。よってメルフィ、そなたへ処罰を言い渡す。大天使の地位を剥奪し…
……翼を、^もぐ。」

「！！……そ、そんな！？アラリエラ様、それだけは！！我ら天使は翼が無ければ死んだも同然！お願いします、それだけはお許しください！」

「――メルフィ、これは罰なのだよ。罪を犯せば、それ相応の罰が下る。賢いそなたなら、分かっているだろう…？」

「……っしかしそれは…あんまりです…。」

「――……。衛兵、罪人を連れてゆけ。翼を[？]ぎ、”中”へ」

落とす』のだ。

！あ、アラリエウ様っ！お許しを！いやっ、触らないで！……アラリエウさまあああああああああああ……！！！！！！！！！！

「……すまない、メルフィ。私の可愛い愛し子よ。どうかそなたに、星のご加護を……」。

";下";ノ国（前書き）

今度は悪魔の方。下から追放されるので、『上げる』になっています。

";下";ノ国

――悪魔^{あくまぢょう}長、ガスペクト。

…ああ。

――…なんだその顔は。全く…、罪人になってもお前の態度は変わらんようだな。

当たり前だ。んなもん何で俺が気にしなきゃなんねーんだよ。

――何で俺が…か。…我はお前のそういうところは、気に入っていたんだがな…。

ふん、ご愁傷様だな。お前は相変わらず人を見る目がない。ざまーみやがれ。

――…っお前、…はあ…。お前の相手は本当に疲れる…。さっさ

と終わらせるぞ。

はいはい。

――お前の判決は有罪。勿論全員一致だ。

は、俺ってそんなに嫌われてんだなァ。さーみーしー。

――ふざけるなよ、ガスケット!!!!

…くっくっ。口調が戻ってんぜ？ザルエサル殿。

――っ本当にお前は…最悪だな。

お褒めの言葉をありがとよ、ふん。

――…ガスケット、お前の処分を言い渡す。

あいよ。

――悪魔長の地位を剥奪、そしてお前が持つ全ての魔力を没収する。

っはあ！？正気かよ、ザルエサル！！！

――我の名を呼び捨てるでない、罪人。

っ…は。魔力奪って”中”に『上げる』ってか？冗談じゃねえぞ。

――すでに決定事項だ。改竄かいざんの余地はない。…衛兵。

チツ、くそつたれが…！！！！覚えてろよ、ザルエサル。絶対に、許さねえからなああああああああ！！！！！！

――やれやれ、あの横着者もこれで少しは大人しくなるかな。
：
ガスケット、せめてお前に…星のご加護を。

罪深き天使 ー 1

ざわめく周囲はもはや騒音としか言いようがない。その上鼻につく香りで空気は淀んでいる。

…いつものことながら最悪だわ。

「天原様あっ！」

「キヤア！今日もお美しいわねー…！」

「和音様…！」

悲鳴のような声を上げて叫ぶ周りの女子達に、私はお得意のにつこり天使のスマイルをお見舞いしてあげた。心の中では、（うるさいわね、耳障りだわ）と思っているのだけれど、そんなことはおくびにも出さない。私はそんなドジじゃない。

あまはら
天原

かずね
和音。

星薔薇学園女子高等部2年の生徒。学校一の秀才

で絶世の美少女。…それが、私。

「きゃーっ…！！和音様が微笑んでくださったわぁ…！！」

さらに大きくなってしまった嬌声に、自業自得とはいえ「はあ…」とため息をつくしかなかった。

私の平穩は、どこにあるのかしらね…。

教室にいても何処にいても、うるさくて落ち着けやしない。私は仕方なく重い腰を上げ、屋上へ居座ることにした。

屋上のフェンスにもたれながら、空を見上げる。今日も空は青い。でも私が思いを馳せるのは、その空の向こうに存在するはずの”上”ノ国。

一ヶ月前、私はとある罪を犯した罪人となり、”上”ノ国から追放された。翼を？ぎ取られ、ここ、”中”ノ国へと『落とされた』のだ。

…”上”ノ国は変わらないだろうか…。

サーラン。私の大切な妹。落とされる前、牢獄に入れられていた私を人目も憚らず会いに来てくれた。

「メルフィ様！サーランはメルフィ様のことを忘れません！貴女様が私にしてくださったことを、わすれるようなことはいたしません！絶対に、貴女様が戻ってこられるようにしますから、ですからどうか、ご無事で…」

目に大粒の涙を浮かべながら、『落とされる』私を見送ってくれたサーラン。元気、かしら。一人で泣いてはいないかしら…。あの子は昔から、泣き虫だったから。

しばらくサーランを思い出しながらブーツとしていると、授業の始まりを告げる鐘が鳴り、私は我に返った。

授業は…サボっちゃおう。面倒だし。

…せめてもの慈悲と、アラリエラ様は『落とす』際、私に大量のお金と住む場所を与えてくださった。その後は自分の”魔力”を使い、この星薔薇学園の理事長の孫になりすまし、入学。戸籍等もしっかり偽物を用意した。

そういうわけで、私は実年齢2567歳にして人間の高校生と同じように生活しているのだ。既に知っていることを教えられるのは至極面倒だけれど、仕方が無い。保護される立場にあり、最も自由な時期は高校に通っている時だから。

理事長の孫という特権もあり、授業にあまりでなくても怒られないし、どんな場所も出入り自由。

初めは小言を言っていた先生方も、私の類稀なる頭脳―自分でいうのもなんだけれど―は認めてくれたみたいで、今はもう何も言ってこない。

…という設定になっている。

実は私が来る前の記憶を少し弄らせてもらった。だから全員、私は一年の時から在学していると思ってるのよね。

ふふふ、”魔力”って便利よね…（黒笑）

「和音！」

その時、背後から声がかかって振り返るとそこには一人の少女が満面の笑みを浮かべて立っていた。

「おはよう、和音」

「…おはよう、蓮奈^{れんな}」

蓮奈には、さっき私の周りを囲んでいた女子達の向けていた作り笑顔とは違う、本当の笑顔を見せた。

蓮奈は私が唯一心を許せる人間。ここに『落とされ』てずっと不機嫌そうな顔で過ごしていた私に、本当にしつこいくらい付き纏ってくれていて、一度は冷たく突き放したんだけど…それでもめげずに絡んでくるから、私も折れちゃったのよね。

でもそれから蓮奈と過ごすようになってしつかりと彼女を見て、「この子なら信用できる」って思ったから…今では親友に近いポジション、かな。照れるから本人には言わないけれど。

でも勿論、『天原 和音』が”天使”だってことは、知らない。

「もー、教室来ないと思ったらやっぱりここにいたんだ」

「だって屋上、気持ちいいじゃない」

…それに、誰も来ないしね。

そう呟くと、なるほど、そっちが本音か、と苦笑された。

罪深き天使 ー 1 (後書き)

12／31に修正しました。

罪深き天使 一 2 (前書き)

12／30 修正しました。

罪深き天使 一 2

「…その美しさじゃ、周りが騒ぐのも仕方ないってもんでしょ」

「…好きでこんな顔じゃないのに…」

天使は皆神々しく、その姿も美しい。元とはいえ私もそのはしくれ。たとえ人間の姿をしていたとしても、その美しさは変わらないみたい。…自意識過剰じゃなくて、事実、よ？

「悪いけど、あたしはそんな美人じゃなくて良かったな」

ズバツと言ってくれた蓮奈も実は無自覚なだけで美人。でもどちらかというと、可愛い、になるのかしら。

耳の横でツインテールにしている髪、パッチリとした人形のような目、少しでも桃色に染まる頬に、白い肌。プルプルの唇は甘い果実のよう。

だから決して人気がない訳ではないのだけんど…。

「…蓮奈はどちらかというと男受けする顔なのよね…」

「え？」

「いえ、何でもないわ」

私の顔がどっち受けなのか分からないけれど…。まあ、どうでもいいわね。

それにしても、男に囲まれるのが嫌で女子校に入ったのに…女子にまで追いかけられるなんて思いもなかった。…人間って恐ろしいわ。

「あ。和音、今日は一日サボり？」

「ええ、そのつもりよ」

「りょーかい。お昼にまた来るー」

「もう行くの？」

残念だわ。

そう言うと、蓮奈はニヤリと目を細めて、

「あたしはどっかの誰かさんと違っておバカなのでね」

「あら、嫌味ったらしく言うなんて…心外ね」

”上”ノ国の勉強に比べれば、”中”ノ国の勉強なんて赤子も同然。むしろこんなのが勉強でいいの？って疑問に思ってしまうくらいだ。それにさっきも言ったように、今やってる勉強なんて既に学習済み、だしね。人間達からしたら、フェアじゃないかもしれないけれど。

「じゃあ、後でね」

「ええ、また」

キィ、と屋上のドアが軋む音がして、バタンと閉まった。

…一人きりに戻った屋上は、可笑しいくらい静か。私はまた、馳せるように空を見上げた。

「アラリエラ様…」

私の罪は、永遠に許されぬのでしょうか…。

「はい、あーん」

「あーんっ」

大きく口を開ける蓮奈に唐揚げを挟んだ箸を近付けると、蓮奈は一口でペロリと食べてしまった。

「んー、おいしいっ」

「ありがとう。蓮奈にそう言ってもらえると嬉しいわ」

高く昇った太陽の下、私達は屋上で2人並んで仲良くお弁当を広げていた。ボーッとしてたらずぐにお昼になっちゃったのよね…時間が過ぎるのって早いわ。

「からあげ〜！卵焼き〜！」

「楽しそうね…」

もう苦笑しかできない。蓮奈は勉強より何より食べることが好きらしく、所謂食通なんだとか。特に庶民風のご飯が好きなんですって。

週末は美味しいものを求めて、いろんな場所へ足を運んでいるんだとか。…それで何でこんなに細いのかしら…？謎ね。

「んむんむ…ほうらっ！」

「全部飲み込んでから話さないな」

口を一生懸命モゴモゴさせて咀嚼している蓮奈に呆れちゃうんだけど、…やっぱり可愛すぎて許してしまう。だって子リスみたいですっごく愛らしいんだもの…。

抱きしめたい衝動に駆られていると、ようやく全部飲み込めたのか、蓮奈が私に向かって口を開いた。

「んーつとね、実は駅前にオシャレなケーキ屋さんを見つけたの。よかったら放課後どう？」

まだ食べる気なの、あなた…。

「良いわよ、…と言いたいところだけれど、今日は用事があるからパスするわ」

「用事って…あ、もしかして、…生徒会？」

「そう。連合祭の打ち合わせですって」

「へー、もう連合祭の季節か。早いねえ」

蓮奈は楽しそうに呟いた。

罪深き天使 ー 2 (後書き)

類は友を呼ぶ、というやつです。

天使のターンはあと2、3話で終了します。

罪深き天使 一 3 (前書き)

1
2 / 3
1 修正しました。

罪深き天使 一 3

連合祭は、星薔薇学園女子部男子部が合同で行う新入生歓迎会のこと。毎年四月の下旬頃から男子部の生徒会と一緒に打ち合わせを始めて、約半月で企画を完成させる。

同じ学園内に存在しているからといって、女子男子部が一緒にやるイベントは本当に数少ないらしく、一般生徒は彼氏彼女を手に入れるため、血みどろの戦いを始めるみたい。

まあ私は死んでもそんなのに参加したくはないけれど、見るだけなら楽しいかもしれないわね。

：話が逸れたけれど、私は副生徒会長をしているため、それだけはサボることが出来ない：ああ、面倒だわ。

「だから、明日でもいいかしら」

「ん、いいよ。いつでも大丈夫だし、それに和音と一緒にじゃなきゃ意味がないもん」

「ありがとう」

にこつと微笑んだ蓮奈に、私も微笑み返した。

蓮奈はまるで天使のようだ。慈しみ深く、優しい。元天使の私より、ずっと…。

「それにしてもさ」

「ん？」

蓮奈は少し口を尖らせて、

「新人生歓迎会なんて一緒にやる必要ないよね。和音に変な虫がいたらどーすんのよホント！！！」

「虫なんてつかないわよ。一緒にやるのは予算の問題だとか聞いたけれど…。でも、蓮奈にしたら嬉しいんじゃないの？ 合同で」

蓮奈は男子部に彼氏がいる。だからむしろ嬉しいんじゃないかと思っただけだ。

「そりゃね、一緒に行事ができるのは嬉しいよ？ こんな機会滅多にないし。でも恭^{こう}カ^かツ^つコ^こいいから他の女子に囲^{かこ}まれちゃうし…」

「ヤキモチね」

「ちっ、違うもん！」

慌てて弁解する蓮奈を見ると、ちょっと悪戯心が芽生えて、

「ふふ、そういうところが可愛いよね、蓮奈は」

「からかうなー！！」

ちよつと虐めてしまった。可愛いって罪よね…。

ぷんぷん怒って頬を膨らませる蓮奈にクスツと笑いながら、男子部のある方角へ顔を向けた。…それにしても憂鬱だわ。この顔のせいで男どもは群がってくるだろうし…。昨年も散々だったって設定だしねえ…。

「かーずねー、聞してる？」

「…ごめんなさい、聞いてなかった」

気が付くと蓮奈が私の目の前で手をひらひらさせていた。ボーッとしていたら、蓮奈の話を聞き逃してしまったらしい。

「もう、ちゃんとしてよー！あのね、恭がその日、紹介したい人がいるんだって。男の子だけど…会ってくれない？」

「男ねえ…蓮奈の知ってる人？」

「ううん、会ったことないけど。一ヶ月前に転校してきて、なんでか恭と仲良くなったみたい」

「へえ、あの一匹狼が仲良くする転校生ね…」

「興味ある？」

ひよこつと蓮奈が首を傾げた。まあ確かに…興味はある、わね。

「まあ、ちょっとは」

「じゃあ会ってくれる？」

「考えておくわ」

興味があるからといって、やっぱり男とは…あんまり関わりたくないし。でも強引な蓮奈のことだから、多分どうせ会う事になるんだろうけどね…。

「了解つ。じゃ、もう授業始まるから行くね」

と言いながら蓮奈はお弁当箱を持って立ち上がった。

「ええ、私も気が向いたら行くわ」

「はいよ。じゃね」

にこつと小さな笑みを残して出て行った蓮奈。行動早…。

さて、と。

「連合祭…どうなることやら、ね」

罪深き天使 一 3 (後書き)

星薔薇学園はほぼ独立した女子校男子校みたいになってます。交流は年に5回あるかないか……ぐらいです。

幕間 嘆きの唄

上の天使の役目とは

人と世界を愛すること

しかし落とされし天使には

愛しみを生み出せぬ

やがて消えゆく心には

もう光は灯らない

――

『…あら？』

『どうしましたの、お姉様』

『もう…お姉様はやめてと言っているのに』

『お姉様はわたくしのお姉様ですから！それ以外の何物でもありませんもの！！』

『もう、分かったわよ。…それより…今ね、聞こえたのよ』

『聞こえた…何ですか？』

『貴女には聞こえない？私には聞こえるわ…』

罪深き天使の、
”嘆きの唄”が』

幕間 嘆きの唄（後書き）

罪人の歌、
みたいな何かです。

罪深き悪魔 — 1 (前書き)

悪魔のターンです。やっとか…。

罪深き悪魔 — 1

「いやー、今日も空が青いねえ」

「…あつそ」

隣で両手を空に上げて呟く恭きょうに素っ気なく返事を返した。

そんな俺に不満そうな顔をして、

「おいおい、反応薄すぎるだろー。もーちよつと感情豊かにだな…」

「あーっ！鬱陶しい！ちよつとぐらい静かに出来ねえのかお前は！
」

ひっでえ、と恭が呟いた。

口を尖らせたこいつのフルネームは、坂本^{さかもと} 恭。俺のトモダチってやつだ。

「俺が空が嫌いなこと知ってんだろ」

”空”なんて、くそくらえだ。天使なんか管理する、空なんか。

「…たくよー何でそんな嫌いなのか知らねえけどさ。意地っ張りなんだから、椀くんは♪」

「キモイシネ」

「ぐさっ…」

地戸^{ちと} 椀^{もみじ}。星薔薇学園男子部高等部二年の生徒。学校一の天才で、そしてまたイケメン…らしい。それがこの俺。

俺は未だに暗いオーラを纏っている恭を横目に、芝生の上に寝転がった。この中庭は沢山の木々で覆われているから、空の見える範囲がかなり少ない。だからここによくたまっているわけだ。

…元悪魔である俺に、あの空は…まぶしすぎる。

一ヶ月前。俺はある罪を犯しこの”中”ノ国へ『上げられた』。
”力”を取られ、何も出来ず無力なまま。

『落として』くれやがった今の魔王は、実は俺の友人。罪人とはいえ見捨てられなかったのか、多額の金と住居を与えられた。でもそれ以上の干渉は魔王であるアイツには出来ない。王は常に、平等でなければならいとされているからだ。それだってかなりのリスクを負って秘密裏に行われたのだろう。

”力”が残っていれば人間の記憶を弄ったりして操作できたんだがな…すべて取られてしまった以上、全部初めっからやらなければいけないかった。

金は有り余るほどあるから、偽の戸籍とかいろいろ用意して、この

星薔薇学園男子部に転入したってわけだ。

「あーあー、樫くんって残酷うー」

「しね」

「……………」

罪深き悪魔 ー 1 (後書き)

お気付きでしょうが、恭が蓮奈の彼氏くんです (＊＾＾＊)

罪深き悪魔 一 2

：恭とは何でか、よくつるむようになった。人間は天使同様憎^ぞ悪^{うお}の対象。でも：

《なあ、お前俺とつるまねえ？》

一匹狼と謳^{うた}われていたはずのコイツは、転校初日に声をかけてきた。後から何故か、と聞くと、

《え、気分？》

なんて言いやがった。人間っつーのはよく分からないイキモノらしい。…まあいいけどな。

「それよりさー、もうすぐ連合祭だなー」

いつの間にか復活していた恭が、寝転ぶ俺を覗き込んで言った。

「連合祭？」

なんだそれ。問いかけと共に起き上がる。

「この前放送で言ってたじゃんかよー」

「聞いてなかった」

「ったくう…。連合祭つーのは、女子部と合同で行われる新入生歓迎会の事さ」

「…それ一緒にやる必要あんのかよ…」

「ないけどなー。でも他の奴らは大はしゃぎだぜ？ なんとって女子部と関われるのなんて、年に数回しかないし」

馬鹿だろ…。男丸出しなやつに女共が近付いてくるはずがない。それにしても女と一緒に行事か…最悪だ。サボるか…。

「樵、今女が来るからサボるか…。とか考えてなかった？」

「……」

凶星。

ぐ、と詰まって反論ができない。そんな俺の反応を見た恭が、やっぱりね、と大袈裟に肩を竦めた。

「ダメだぜ？サボってもらっちゃ困るんだよなあ」

「…んでだよ」

「俺の彼女にお前のこと紹介するって言っちゃったから☆」

「☆つけんなうざい」

俺相手にウィンクしてどーすんだよ。そんなのは彼女にしてやれ、彼女に。

「マジヒデー…」

「…とにかく俺は行かねえ」

俺がそう言うと、恭はさっきまでのふざけた態度はどこへ行ったのやら、本当に焦ったような顔をし出した。

「は！？ちょ、ホントにダメだって！蓮奈って約束破るとキレんだよ！それに…」

「それに？」

「星薔薇一の美女もいるぞ？」

恭の彼女、蓮奈って言うのか。ふーん。とか考えつつ、「美人はキライだ」と返事を返した。

「偉そうだしな」

そう呟く俺に、恭は憤慨したように顔を歪める。

「和音ちゃんはそのんな子じゃねえよ。優しくて、ニコニコしてて、めっちゃいい子だ！」

「…何故お前がムキになる」

「蓮奈の親友だからな！！」

ふんっ、と鼻息荒い恭にため息を吐くと同時に、不思議に思った。彼女の親友というだけで、どうしてそんなにハッキリといい子だと言い張れるのか。本当に、人間というのは不思議なものだ。…全く、仕方が無い。

「行きゃいいんだろ…」

「そーこなくっちゃ」

面倒臭え…と思いつつも、心の何処かで楽しみに思っている自分に気付き、驚いた。この俺が会った事もない人間に会うのを楽しみにしている、なんて。

「（…世の中、何が起こるかわかんねえもんだな…）」

「じゃあ俺参加申請してくるわ!!」

そう騒ぐ恭をよそに、

「…連合祭ね…」

眩いた俺は眩しい太陽から逃げるように、目を閉じた。

罪深き悪魔 ー 2 (後書き)

恭は既に権の思考を把握しているようです W W W
悪魔のターンはこれで終了です。

幕間 憎しみの唄

下の悪魔の役目とは

人と世界を憎むこと

しかし『上げ』られし悪魔には

憎しみを生み出せぬ

やがて現れる心には

小さな光が静かに灯る

『ちょっとあんた!! 待ちなよ!!』

『ああん!? ふざけんな年増! 誰が待つかよ!!』

『…誰が年増だってえ!!? 待ちな、このクソ餓鬼がつ』

『ばーかばーか!!!!』

『ちっ…逃げ足ばっか速い餓鬼が…おや?』

『おーいおばちゃん、坊やを見なかったか?』

『だつれがおばちゃんだ! ったくどいつもこいつも…餓鬼なら向こうへ行ったよ』

『悪い悪い。やれ、坊ちゃんが迷惑をかけたなあ…って、これは…』

『…気付いたかい? 何年ぶりだろうねえ…この唄を聞くのは。罪人』

はどんなやつなんだろうねえ…』

『さあ…とんでもないやつだろうよ。なんせ

あの”憎しみの唄”を歌わせられるくらいなんだからな』

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0893y/>

星降る薔薇園のジंकス

2011年12月31日19時49分発行